# 由緒および信仰的意義に着目した神社空間の自然災害リスクに関する研究 —和歌山県下の 398 社を対象として—

高田 知紀(神戸市立工業高等専門学校 都市工学科, t-takada@kobe-kosen.ac.jp) 桑子 敏雄(東京工業大学大学院 社会理工学研究科, kuwako@valdes.titech.ac.jp)

A study on disaster risk of shrines in Wakayama prefecture based on its origin and religious meaning Tomoki Takada (Department of Civil Engineering, Kobe City College of Technology)

Toshio Kuwako (Graduate School of Decision Science and Technology, Tokyo Institute of Technology)

#### 要約

本研究は、「ある土地において信仰上の重要な役割をもつ神社は、自然災害発生時においても安全性を担保しうる立地特性を有している」という仮説にもとづいて、和歌山県下の398社の神社を対象に、その自然災害リスクのポテンシャルを検証することを目的としている。GISを用いた分析、および現地調査を通して、津波、河川氾濫、土砂災害のそれぞれのリスクと神社の立地との関係を分析した結果、和歌山の土地に深いルーツを持つイソタケル系神社、熊野系神社、王子系神社の多くは、自然災害に対してのリスク回避性が高い立地であることを明らかにした。特に、和歌山県において古代から信仰上の重要な意味をもつ王子系神社の立地特性は、津波、河川氾濫、土砂災害のいずれの災害リスクも回避しうるものであることを示した。この研究成果は、伝統的に、神社の立地には災害リスク対応という人びとの意識が反映されていることを意味しており、今後の防災・減災計画を検討するうえでふまえるべき重要な知見となる。

#### キーワード

神社、自然災害リスク、防災・減災、避難計画、祭神

### 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

本研究は、「ある土地において信仰上の重要な役割をもつ神社は、自然災害発生時においても安全性を担保しうる立地特性を有している」という仮説にもとづいて、和歌山県下の398社の神社(図1)を対象に、その自然災害リスクのポテンシャルを検証することを目的としている。

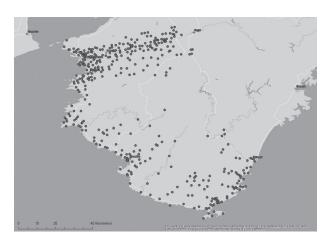


図1:和歌山県の神社の分布

2011年の東日本大震災は、日本の国土に大きな被害をもたらし、しばしば「未曾有の大規模自然災害」として報じられることがあった。しかし、東北地方に大地震や大津波が襲来するということは、数百年、あるいは数千

年の時間スケールで歴史をみた場合、すでにその空間のなかに刻まれた災害の履歴が示していた。重要なのは、たびたび日本の国土に襲来してきた大規模自然災害の履歴をどのように掘り起こし、いかに今後の防災・減災方策を講じていくかということである。

そこで本研究で着目したのが、古来、日本の風土性のなかで人びとが信仰してきた神社空間である。東日本大震災においても、古くからその地に鎮座している神社の多くが津波の被害を免れていたことが宇多他(2012)や高世他(2012)によって明らかにされている。本研究では、東日本大震災の調査研究による知見にもとづきながら、今後起こりうる自然災害について予測的に神社の被災リスクを検証する。さらに、津波だけでなく、河川氾濫および土砂災害のリスクについても、神社の立地の安全性を検討する。

### 1.2 対象地および研究方法

本研究の調査対象地は和歌山県全域である。和歌山県は、熊野古道の世界遺産登録に象徴されるように、日本の信仰を考える上で価値の高い地域である。一方で、南海トラフ地震が発生した場合には、津波による大きな被害が想定される。また、山地の多い地理的特性から、土砂災害も多い地域である。

研究の方法は主に、①神社の位置情報およびその由緒の抽出とリスト化、②津波、河川氾濫、土砂災害のリスクのマップ化、③神社の配置と災害リスクのGIS上での統合、④由緒と信仰的意義に着目した神社の自然災害リスクに関する考察、の4つのステップから構成される。

神社の位置情報の抽出については、和歌山県神社庁オ

フィシャルサイトで神社の所在地住所を参照し、アドレスマッチング方式によって緯度経度を割り出した。また、アドレスマッチングによって住所の番地・号まで緯度経度を正確に抽出できない場合は、ゼンリン地図上で位置を確認した。また、神社の位置情報だけでなく、神社庁オフィシャルサイトでの情報、および安藤・五来(1983)、川口(1999)、倉野(1963)、坂本他(1994)の知見を用いて、神社の創建年、祭神、由緒および各神社の信仰上の意義についても調査し、リスト化を行った。災害リスクについては、津波、河川氾濫、土砂災害の危険区域をGIS上で可視化した。

次に、神社の位置情報と災害リスクに関する可視的データを GIS 上で重ね合わせ、それぞれの神社の災害リスクを検証した。手続きとしては、津波、河川氾濫、土砂災害のそれぞれにおいて、その危険区域内にどれだけの神社が位置しているかということを分析した。

最後に、和歌山県における各神社の信仰上の意義およびそれぞれの神社の祭神や由緒をふまえて、より詳細に神社空間の災害リスクについて考察を行った。

### 2. 本研究の論点

### 2.1 自然災害リスクの低減に向けた神社の意味

筆者らは、2011 年から 2012 年にかけて、東日本大震災の被災地において、沿岸部神社の被災状況の調査を行った。東北においては、震災直後から、多くの神社が津波の被害を免れていることが報道などで注目されていた。また、研究者の間でも、たとえば宇多他(2012)は、早くから神社の立地特性に着目し、津波の被害状況について調査研究を行っていた。筆者らも、復興支援ボランティア活動に参加した際に、津波被害のあった地域をみてまわった。その際に、多くの建物が流され、更地になった沿岸部において、丘陵地の麓に立つ多くの鳥居を確認した。

実際に、宮城県を中心に沿岸部 215 社を対象に、津波の被害状況調査を行った。その結果、津波の被害を免れたのは 139 社、一部のみ浸水した神社が 23 社と、その 8 割近くが無事であったことを明らかにした。

防災・減災計画において神社に着目することの大きな 意義は、ひとつは千年単位での災害の履歴を掘り起こす ことができる点である。東日本大震災、あるいは今後起 こるとされている南海トラフ巨大地震のように、その発 生周期が数百年の単位の大規模自然災害については、ひ とりの人間の寿命をはるかに超えた時間スケールで発生 するものである。そのような長期的時間スケールで発生 する災害のことを、人びとが後世に長く伝えていくこと は容易ではない。しかし、伝統的に地域の精神的支柱で もあり、お祭りなどの地域行事や日常的な参拝が行われ ていた神社空間は、人びとの意識に残りやすい空間であ ると考えることができる。したがって、神社空間の自然 災害リスクを検証することは、今後、長い時間スケール に立った防災減災計画を立案するうえでも重要な意味を もつと考えることができる。

### 2.2 祭神によって異なる津波被害の重度

筆者らが東日本大震災の被災地において行った調査研究の大きな成果は、それぞれの神社に祀られている祭神によって、津波被害の重度が著しく異なるという結果を示したことである(高田他, 2012)。具体的に述べれば、宮城県沿岸部に鎮座する神社のうち、スサノオノミコトを祀る神社、熊野系神社、八幡系神社は、そのほとんどが津波被害を免れていた。一方で、アマテラスを祀る神社、稲荷系神社は、その半数以上が被災していた。

その背景について考察すると、まずスサノオはリスク 時に神徳を発揮する神であることが考えられる。スサノ オは日本神話のなかで出雲の国においてヤマタノオロチ を退治した神である。西宮(1979)によれば、このヤマ タノオロチは、出雲の国を流れる斐伊川を表していると いわれる。つまり、ヤマタノオロチを退治したという伝 説は、たびたび氾濫し、人びとを苦しめる原因となっ た斐伊川の水害を治めたということを意味する(桑子, 2016)。また、スサノオは大陸から渡ってきた牛頭天王と いう神と同一視される。牛頭天王はいわば疫病の神であ る。スサノオと牛頭天王が同一視されるということは、 すなわち、水害とその後に流行する伝染病の両方のリス クを回避したいという古くからの日本人の関心が反映さ れている。言い換えれば、人びとは、スサノオや牛頭天 王を水害・疫病のリスクを回避したいから神社に祀った のであり、そのような場所は当然、リスク発生時にも安 全である必要がある。

また、八幡神は源氏の氏神として知られている。武神としての性格をもっており、東北地方では、源氏が戦争に赴いた際に、陣を張った場所に、その後八幡神を勧請して神社を建立したという話が多く伝わっている。戦争の際に陣を張る場所というのは、交通の要所である場合が多い。また、小高い丘陵上から周辺の状況を見渡すことができ、かつ水資源などの確保が容易な場所である。そのような場所は津波や水害の災害発生時にも安全である可能性が高い。

以上のことから立てることのできる仮説が、「ある土地において信仰上の重要な役割をもつ神社は、自然災害発生時においても安全性を担保しうる立地特性を有している」というものである。神社の立地は、自然発生的なものではなく、長い歴史のなかでその神社の建設と維持にかかわった人びとの関心・懸念の結果であると考えられる。本研究は、神社の空間的配置が災害の履歴と人びとの関心懸念の統合を示すものであるという視点にもとづく調査である。本研究では、東日本大震災の被災地において実施した調査研究の成果をもとに、今後発生すると考えられる災害について予測的に神社の災害リスクポテンシャルを検証する。

### 3. 和歌山県における神社の自然災害リスク

## 3.1 和歌山県の文化的・空間的特性

和歌山県を対象としたのは、主に以下の2点の理由からである。1点目は、和歌山県は熊野信仰をはじめとして、

日本における信仰上の重要な地域だからである。熊野信仰だけでなく、古事記、日本書紀などには和歌山を舞台とした描写が多くみられる。2点目は、その地理的特性から土砂災害、津波被害、河川氾濫など多様な自然災害が発生するリスクが高い地域だからである。2011年の台風12号襲来時には、和歌山県の各地において大規模な土砂崩れや河川氾濫による被害が発生した。また、今後起こりうる南海トラフ巨大地震発生時の津波被害、紀ノ川をはじめとする河川氾濫など、様々な自然災害のリスクが高い地域である。そこで本研究では、和歌山県をモデル地区として神社空間の自然災害リスクのポテンシャルについて考察することとした。

### 3.2 津波リスクのポテンシャル

まず、和歌山県における神社空間の津波災害リスクについて検討する。津波については、今後、和歌山県において甚大な被害をもたらすことが想定できる南海トラフ巨大地震の津波シミュレーションデータを用いた。データは、「内閣府南海トラフの巨大地震モデル検討会」より公開された南海トラフ巨大地震の予測浸水深のうち、和歌山県下で予想浸水深が最高になるものを採用した。

津波の想定浸水域内に位置している神社は、和歌山県 下 398 社のうちで 38 社であった。すなわち、全神社のお よそ10%にあたる。たとえば、図2は日高町・御坊市 付近における津波浸水想定域と神社の配置の関係である。 このエリアでは、「79:小竹八幡神社」と「167:御霊神社」 が浸水域内に位置している。その他の神社は、浸水域の 境界付近に多く立地していることがわかる。また、「186: 松原王子神社」は、浸水域内に位置しながらも島状に被 害を免れている。図3は、田辺市付近の神社の配置である。 このエリアは切り込んだ海岸地形になっており、津波の 想定高も高く、大きな被害が出ることが予想できる。田 辺市付近でもいくつかの神社が被災するシミュレーショ ン結果となっている。「7: 鹿島神社」、「109: 蟻通神社」、 「112:浦安神社」、「116:神楽神社」、「128:闘鶏神社」 などである。これらの神社はいずれも、海岸部の平地の 上に位置している。図4をみてみると、和歌山市沿岸部

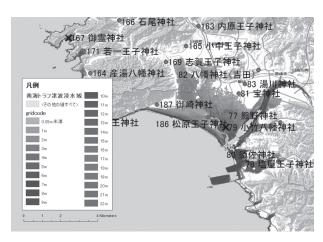


図2:日高町・御坊市付近の津波浸水域と神社

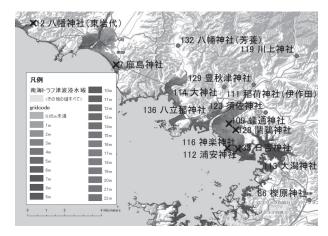


図3:田辺市付近の津波浸水域と神社



図4:和歌山市付近の津波浸水域と神社

では、津波高さはそれほど高くないものの、紀ノ川の河口付近で浸水被害が想定されている。この付近では、「222:鹽竃神社」や「254:矢宮神社」といったいくつかの神社は浸水する結果となっているものの、多くの神社が浸水域の境界付近で被害を免れる。

### 3.3 河川氾濫リスクのポテンシャル

次に、神社空間の河川氾濫リスクに関するポテンシャルを検証する。河川氾濫については、国土交通省国土政策局国土情報課が公開している国土数値情報ダウンロードサービスの「浸水想定区域データ(データ作成年度: 平成24年)」を用いた。

今回対象とした和歌山県下の398社の神社のうち、河川氾濫で被害の出る可能性のある神社は37社であり、津波と同様に、全神社に対しておよそ10%という結果になっている。このことから、多くの神社は、河川の氾濫の危険性を回避した立地特性を有していることがわかる。

神社が河川氾濫による浸水の被害がもっともあると想定されるのが和歌山市の紀ノ川付近である。図5は河口付近の浸水域と神社の配置である。浸水深が5m以上と高くなるエリアには神社は位置していない。

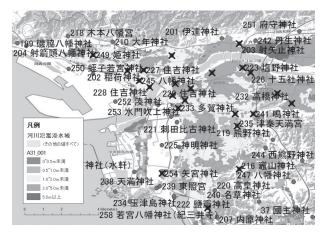


図5:和歌山市付近の河川氾濫域と神社

### 3.4 土砂災害リスクのポテンシャル

神社空間の土砂災害リスクについて検討を行った。土砂災害についても河川氾濫の場合と同様に、国土数値情報ダウンロードサービスの「土砂災害危険個所データ(データ作成年度:平成22年度)」を用いた。

その結果、本研究の対象全398社のうち、土砂災害危険区域内に鎮座しているのは133社であった。全神社に対しておよそ33%が土砂災害危険区域内に位置する結果となり、津波や河川氾濫に比べてその割合は高い結果となった。

図6は紀ノ川中流部にあたるかつらぎ町付近の結果である。紀ノ川を挟むようにして連なる山地には、土石流危険渓流や地すべり危険個所が分布している。このエリアで特に多かったのは、土石流危険渓流の域内に位置する神社である。一方で、山地内においても、土砂災害危険区域をすべてかわす形で鎮座している神社も多くある。

2011 年に台風 12 号で大規模な土砂災害が発生した新宮市の結果を図7に示す。新宮市付近においても、土砂災害危険区域内に位置する神社がある一方で、「139:青彦神社」、「147:熊野那智大社」など、危険区域をすべてはずれている神社も多くある。



図6:かつらぎ町付近の土砂災害危険区域と神社



図7:新宮市付近の土砂災害危険区域と神社

### 4. 神社の由緒と信仰的意義への着目

和歌山県下のそれぞれの神社の由緒および信仰的意義に着目し、自然災害リスクについての検討を行った。本研究ではまず、平安時代の法典である「延喜式」に記載されている神社、すなわち式内社の災害リスクを検証した。さらに、和歌山の土地に深くかかわるイソタケル系神社、熊野系神社、王子系神社のそれぞれについても同様に、その自然災害リスクを検証した。

### 4.1 延喜式内社

延喜式内社とは、平安時代に編纂された「延喜式」のなかに明記された神社のことである。延喜式の「式」とは、いわば規範、規格、法律、節度という意味をもつ語である。すなわち「延喜式」とは、延喜の時代に整備・編纂された法典という意味である。延喜式以前にも、貞観式、弘仁式といった法典が存在した。延喜式はこれら両式を併合し、重複する部分を省くことで、より体系的な式とすることを目的に編纂された。延喜5年(905年)に醍醐天皇の勅命により、左大臣・藤原時平らが編纂を開始し、22年後の延長3年(927年)に奏進、さらにその40年後(929年)に施行された。全50巻から構成されており、条数は約3,300条と膨大な量となっている。

この延喜式のなかには神名帳と呼ばれる神社の一覧があり、それらはいわば当時の官社の一覧表と考えることができる。律令制度下の王朝時代において、国司の重要な仕事は、神祭を行うこと、神社を修造・管理することであった。そのなかで国司は、2月の祈年祭や毎月の朔日などにおいて幣帛を配布する任務を担っていた。幣帛とは、祭祀における神への捧げ物を指す。この任務を遂行する上で問題となるのが、全国に幾多とある神社のうちで、どの神社に幣帛を配布するかということである。そこで、当時、霊験があるために朝廷より重要視されていた格式高い神社のリストが作成された。それが延喜式神名帳である。したがって式内社は、当時国家から積極的にサポートされていた神社であり、多くの人びとの信仰を集めていた重要な神社であると考えることができる。また式内社は、少なくとも延喜年間以前から存在してい

No	神社名	所在地	津波	河川氾濫	土砂災害
64	潮崎本之宮神社	東牟婁郡串本町串本 1517 番地	×		
95	熊野速玉大社	新宮市新宮1番地			
121	熊野本宮大社	田辺市本宮町本宮 1110 番地			
191	須佐神社	有田市千田 1641 番地			×
197	朝椋神社	和歌山市鷺ノ森明神丁 22 番地		×	
198	伊久比売神社	和歌山市市小路 330 番地		×	
200	伊太祁曽神社	和歌山市伊太祈曽 558 番地			
201	伊達神社	和歌山市園部 1580 番地			
211	大屋都姫神社	和歌山市宇田森 59 番地		×	
216	竈山神社	和歌山市和田 438 番地		×	
221	刺田比古神社	和歌山市片岡町2丁目9番地			
224	志磨神社	和歌山市中之島 677 番地		×	
231	髙積神社	和歌山市禰宜 1557 番地			
236	都麻津姫神社	和歌山市吉礼 911 番地			
237	都麻都姫神社	和歌山市平尾字若林 957 番地			
240	名草神社	和歌山市冬野宮垣内 2107 番地			×
241	鳴神社	和歌山市鳴神 1089 番地		×	
255	山口神社	和歌山市谷 377 番地			
256	力侍神社	和歌山市川辺字稲井 61 番地		×	
260	日前神宮・國懸神宮	和歌山市秋月 365		×	
276	丹生都比賣神社	伊都郡かつらぎ町大字上天野 230 番地			×
289	荒田神社	岩出市大字森 237 番地			
302	海神社	紀の川市神領 272 番地			
348	小田神社	伊都郡高野口町小田 76 番地			

表1:延喜式内社の災害リスク

たことから、由緒ある神社である。

延喜式神名帳に明記された式内社は、全国で 2,861 社である。さらにそれらの神社に祀られている祭神の数は 3,132 座となっている。そのうち本研究の分析対象地である和歌山県で全 24 社である (表 1)。

そのうち、南海トラフ巨大地震による津波の被害を受ける可能性が高いのは、「64:潮崎本之宮」のわずかに1社だけであった。土砂災害については、「191:須佐神社」、「240:名草神社」、「276:丹生都比売神社」の3社である。河川氾濫については、24社中8社が氾濫域に位置する結果となった。

以上のことから、延喜式内社は、津波や土砂災害のリスクを回避しうる立地特性であることがわかる。一方で、河川氾濫に関しては、紀ノ川の下流部において多くの神社がその浸水域内に位置していることもわかった。

### 4.2 イソタケル系神社

次に着目したのがイソタケル系の神社である。以下は、 日本書紀に記されたイソタケルノミコト(五十猛命)が 登場する場面の記述である。

初め五十猛神、天降ります時に、多に機種将ちて下る。 然れども韓地に殖えずして、尽に持ち帰る。遂に筑紫 より始めて、凡て大八州国の内に、播殖して青山に成 さずといふこと莫し。所以に、五十猛命を称けて、有 功の神とす。即ち紀伊国に所坐す大神是なり。

イソタケルは、記紀のなかでヤマタノオロチを退治した神として知られるスサノオノミコトの息子である。日本書紀のある書では、スサノオとともに新羅に渡り、帰国した際に天上から将来した樹種を、妹神のオオヤツヒメノミコト、ツマツヒメノミコトとともに日本の全土に播き、その後、紀伊に鎮座したと記されている。この日本書紀の記述からもわかるように、イソタケルは日本の国土に多くの木の種をまき、山林をつくったことから、植林・林業の神として厚い信仰を集める神であり、古く



図8: 伊太祁曽神社の境内からのながめ

から木材の産地であった紀伊国に深くかかわる神である。

イソタケル、オオヤツヒメ、ツマツヒメの三神を祀るのは、和歌山市の「200:伊太祁曽神社」である。この神社は、かつては紀伊国の一之宮として、現在の日前・国懸神宮の地に鎮座していた。しかし、垂仁天皇の時代に、日前・国懸神宮の建立に際してその地を譲り、三神は山東へと遷座した。この伝承はいわば、紀伊国における国譲りの物語と考えることができる。伊太祁曽神社が日前・国懸神宮にその地を譲ったという説話からも、イソタケルが古くから紀伊国の人びとにとって重要な信仰の対象であったことがわかる。

イソタケル、オオヤツヒメ、ツマツヒメを祀る神社とその災害リスクを表2に示す。いずれの神社も津波による被害は免れる結果となっている。また土砂災害に対しても、「192:立神社」のみが災害危険区域内に位置している。これらの結果から、イソタケル系神社は津波および土砂災害に対して、そのリスクを回避しうる空間特性を有していると考えることができる。特に、他の神社に比べて土砂災害に対するリスクが低いのは、前述したように、イソタケルが植林に深くかかわる神だからであり、そのような神を祀る場合には、人びとは山地での災害リスクを回避しうる場所を選定していたと考えることができる。

### 4.3 熊野系神社

和歌山県で信仰上の重要な意味をもつのは熊野信仰である。熊野信仰は、熊野速玉大社、熊野本宮大社、熊野那智大社の熊野三山を総本社としており、この三山を参詣する熊野詣が、古くから貴族や民衆のなかで行われてきた。熊野三山に祀られる神は「熊野権現」と呼ばれる。熊野権現を祀る神社は、和歌山に限らず全国に多くある。「三山」と称するように、熊野系神社は山地や丘陵地、あるいは海岸や河川沿いの段丘上に鎮座していることが多い。

表3の熊野系神社の結果をみてみると、「146:熊野三所大神社」を除いて、すべてが津波および河川氾濫の被害を免れる結果となっている。一方で土砂災害については、全14社のうち、6社が危険区域に位置する結果となった。熊野神社は、「三山」の信仰という背景から、神社を建立する際には高地を選定したと想定できる。そのため、津波や河川氾濫といった低地に襲来する水害リスクに対しては強い一方で、土砂災害についてはリスク回避性が低くなると考えられる。

### 4.4 王子系神社

和歌山において熊野信仰と密接なかかわりがあるのが王 子系神社である。熊野九十九王子と呼ばれたように、かつ

No	神社名	所在地	津波	河川氾濫	土砂災害
70	雷公神社	東牟婁郡串本町樫野 1037 番地			
192	立神社	有田市野 700 番地		×	×
200	伊太祁曽神社	和歌山市伊太祈曽 558 番地			
201	伊達神社	和歌山市園部 1580 番地			
211	大屋都姫神社	和歌山市宇田森 59 番地		×	
231	髙積神社	和歌山市禰宜 1557 番地			
236	都麻津姫神社	和歌山市吉礼 911 番地			
237	都麻都姫神社	和歌山市平尾字若林 957 番地			

表2:イソタケル系神社の災害リスク

表3:熊野系神社の災害リスク

No	神社名	所在地	津波	河川氾濫	土砂災害
18	熊野神社	日高郡印南町大字美里 1553 番地			×
91	阿須賀神社	和歌山県新宮市阿須賀 1-2-25			×
95	熊野速玉大社	和歌山県新宮市新宮1番地			
120	熊野神社 (高原)	田辺市中辺路町高原 1120 番地			×
121	熊野本宮大社	田辺市本宮町本宮 1110 番地			
146	熊野三所大神社	東牟婁郡那智勝浦町大字浜ノ宮 350	×		×
147	熊野那智大社	東牟婁郡那智勝浦町那智山1番地			
176	熊野三所神社	西牟婁郡白浜町 744 番地			
177	熊野十二神社	西牟婁郡白浜町鹿野 1248 番地			
178	熊野神社	西牟婁郡白浜町才野 1757 番地			
219	熊野神社	和歌山市寺内 464 番地			
244	西熊野神社	和歌山市西 478 番地			
314	熊野神社	紀の川市中津川 315 番地			×
334	熊野神社	海草郡紀美野町田 22 番地			×

て人びとが熊野詣を行う際に、その参詣ルート上に多くの 小祠が存在した。それが王子社である。また、王子社に祀 られるのは熊野権現の御子神であると考えられている。

熊野信仰とのかかわりのなかでその重要性が論じられることの多い王子社について、豊島(2013)は、熊野詣が行われるようになる以前から、山岳海辺修行者にとっての重要な場であったと論じている。山岳海辺修行者とは、山岳や谷だけでなく、海岸沿いの古道にある磯や岬、小島などを修行の場としてめぐっていた修行者を指す。その修行者たちが遥拝していたのが王子や王子社である。その基底にあるのは、海のかなたに死者の霊が往く世界があるという海洋他界観である。紀伊半島の海沿いの王子社は、本来的には死者の霊を祭祀する聖地であったと考える事ができる。

紀伊半島における王子系神社は、熊野信仰が盛んになる以前から、人びとの重要な信仰・祭祀の場であった。和歌山県において信仰上重要な意味をもつ王子系神社の自然災害リスクについてみてみると、今回の調査対象となった王子系神社については、全16社のうち、13社が津波、河川氾濫、土砂災害を回避する結果となった(表4)。「1:王子神社」は創建が1564年と比較的新しい神社である。また「143:王子神社(市野々)」についても、江戸時代以前は現在の鎮座地よりも100m上方に位置していたという記録が残っている。王子系神社のうち、1185年以前の創建のものは、すべて津波および河川氾濫の被害を免れる結果となっており、土砂災害についても「126:滝尻王子宮十郷神社」以外は危険区域をはずれている。

このように、古代から紀伊半島において信仰上重要な場所として位置づけられていた王子系神社の立地は、様々な自然災害リスクを回避しうる結果となった。このことは、長い時間のなかでその位置づけが変化したとしても、古くから人びとによって何らかの信仰的意義が持続的に見出されてきた空間は、自然災害にあいにくい空間特性



図9: 塩屋王子神社の境内からのながめ

を有しているということを示唆する。

### 5. 結論と今後の展望

以上にみてきたように、本研究の成果を次のようにま とめることができる。

- 和歌山県下の神社について、南海トラフ地震による津波、河川氾濫、土砂災害のそれぞれの災害リスクを検証した。そのなかで、自然災害が及ぶエリアにおいても、被災を免れる立地特性を有している神社が多くあることを示した。
- ・ 南海トラフ地震による津波被害に関しては、延喜式内 社 96 %、イソタケル系神社 100 %、熊野系神社 93 %、 王子系神社 94 % が被害を回避しうる場所に立地してい ることを明らかにした。
- イソタケル系神社は、津波および土砂災害に対して安全な場所に立地していることを明らかにした。
- 熊野系神社は、津波や河川氾濫といった水害に対して 安全な立地である一方で、山地や海岸沿いの高地に多

No	神社名	所在地	津波	河川氾濫	土砂災害
1	王子神社	西牟婁郡すさみ町周参見 2326 番地	×		×
2	王子神社 (和深川)	西牟婁郡すさみ町和深川 258 番地			
15	王子神社	日高郡印南町大字島田 2916 番地			
53	山路王子神社	海南市下津町市坪 269 番地			
78	塩屋王子神社	御坊市塩屋町北塩屋 1146 番地			
81	宝神社	御坊市湯川町大字財部 865 番地			
94	王子神社	新宮市王子町1丁目14-32			
126	滝尻王子宮十郷神社	田辺市中辺路町栗栖川 859 番地			×
143	王子神社 (市野々)	東牟婁郡那智勝浦町市野々 1993			×
163	内原王子神社	日高郡日高町大字萩原 1670 番地			
165	小中王子神社	日高郡日高町大字小中 862 番地			
168	沙雙神社	日高郡日高町大字志賀字名草 4001			
169	志賀王子神社	日高郡日高町大字志賀字宮脇 901			
171	若一王子神社	日高郡日高町大字比井 992 番地			
186	松原王子神社	日高郡美浜町吉原 771			
297	王子神社	紀の川市東野 409 番地			

表 4: 王子系神社の災害リスク

く立地することから、土砂災害のリスクは回避してい ないことを明らかにした。

• 王子系神社は、81 % が津波、河川氾濫、土砂災害のいずれの災害リスクに対しても安全であることを明らかにした。

これらの結果から推察できるのは、古来、人びとの信仰の場であった神社空間の立地特性には、建立に携わった人びと、あるいはその神社の維持管理を担ってきた人びとの自然災害リスクに対するインタレストが組み込まれているということである。

神社の鎮座地の遷宮そのものが、自然災害への対応の結果である場合もある。和歌山の例でいえば、熊野本宮大社は、かつては熊野川の中州に本殿をかまえていた。しかし、明治期に発生した熊野川の大水害により社殿が倒壊した。その結果、社殿を現在の河川沿いの丘陵上に移したのである。明治期における熊野川の氾濫は、周辺の森林で樹木を過度に伐採したことが原因として挙げられている。それまで千年以上、熊野川の中州に鎮座して、人びとの信仰を集めてきた本宮大社が河川氾濫によって倒壊したのは、近代化のなかで周辺の環境を人間が改変してしまったことにも起因しているのである。

また、古代における災害対応としての遷宮の例では、 兵庫県神戸市の生田神社をあげることができる。生田神 社は神功皇后元年(西暦 201年)の建立当初、砂山(現 在の布引山)に祀られていた。しかし、799年に発生した 大洪水により山麓が崩壊し、社殿が傾いたため、生田村 の刀禰七太夫という者がご神体を背負い、現在の鎮座地 に祀ったという話が伝わっている。

上述の例のように、現在の神社の立地は、災害発生後に 人びとが神社を安全な場所に遷した結果であるケースも考 えられる。したがって、神社の由緒をふまえながら防災・ 減災計画を検討していくうえでは、神社の立地場所の遷移 やその理由・背景について考察することも重要である。

本研究の成果をふまえて今後の課題となるのは、長い歴史のなかで、災害によって廃止になった神社があるか否かという点について考察することである。これまで日本の歴史のなかで最も多く神社が削減されたのは、明治期に政策として実施された神社合祀の時である。本稿の「ある土地において信仰上の重要な役割をもつ神社は、自然災害発生時においても安全性を担保しうる立地特性を有している」という仮説をより深く検討するうえでは、政治的・人為的理由以外に、自然災害の被災によって廃止された神社の有無、あるいはその多少について、古文書などを活用しながら検討する必要がある。

また、現代において、それぞれの地域における防災・減災計画のなかで、長い歴史をもつ神社空間を具体的にどのように位置づけ、その維持管理も含めた活用方策をいかにして講じていくかということについても検討しなければならない。地域によっては、各神社の由緒や伝承などの情報が散逸・紛失しているケースも多い。必要となるのは、神社空間を防災・減災上においても価値をも

つものとして捉えなおし、情報を体系的に整理していく ことである。

本研究の成果が示すのは、これからの災害への地域の備えにおいて、伝統的な日本の文化を適切に理解することが重要な役割を果たし得るということである。地域の人びとが、神社の立地の意味するところを認識することは、そこに暮らした人びとが地域空間をどのように捉えていたかを知ることにつながる。また神社立地に災害リスク対応という意識が重要な役割を演じてきたということを認識することによって、地域防災における人びとの空間意識を高め、また、災害リスク行動の指針を示し得るものと考えられる。

### 謝辞

本研究は、平成 27 年度 JR 西日本あんしん社会財団による研究助成を受けて実施した。関係者各位に深くお礼申し上げる。

### 引用文献

安藤精一・五来重(監修)(1983). 日本歴史地名大系 31 一和歌山県の地名一. 平凡社.

川口謙二(編集) (1999). 日本の神様読み解き辞典. 柏書房. 倉野憲司 校注 (1963). 古事記. 岩波文庫.

桑子敏雄 (2016). わがまち再生プロジェクト. 角川書店. 西宮一民 (校注) (1979). 古事記. 新潮社.

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 (1994). 日本書紀 (一). 岩波文庫.

高世仁・吉田和史・熊谷航(2012). 神社は警告する. 講談社. 高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄(2012). 東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究. 土木学会論文集 F6, Vol. 68, No. 2, I\_167-I\_174. 豊島修(2013). 熊野信仰の世界―その歴史と文化―. 慶

宇多高明・三波俊郎・星上幸良・酒井和也 (2012). 2011 年大津波の災害と被災を免れた神社. 土木学会論文集 B3, Vol. 68, No. 2, I\_43-I\_48.

### Abstract

The purpose of this study is to discuss the ways of natural disaster risk reduction based on the traditional local knowledge. In this study, we focused on the location of 398 shrines in Wakayama Prefecture in order to uncover the profile of space accumulated in the community. More specifically, a survey about the location of shrines and the risk potential of tsunami, floods and sediment disaster showed that many shrines escaped disaster hazard area. And by the investigation of the history and origin of each shrines, we have extracted that majority of Engi-Shikinaisha (shrines listed in Engishiki laws), Kumano shrines, Isotakeru shrines and Ohji shrines are located at out of the disaster hazard area.

(受稿: 2016年8月21日 受理: 2016年11月5日)